大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町７－１１
府教育会館７０４号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

「総括寄宿舎指導員」の選考基準の抜本的改善と「教育職二表2級」への道を閉ざさないよう「総括寄宿舎指導員」選考の実施を求め、

寄宿舎教員署名提出

１０月４日、大阪府庁内で『「総括寄宿舎指導員」選考に関する緊急要請』をおこないました。

大障教寄宿舎教育部８人と山内副委員長が出席しました。

冒頭、寄宿舎教員部長の白木さんは「元々は、賃金改善から始まった制度であり、要件に達した者は全員格付けされるべきもの。賃金改善の道を絶たないよう毎年選考を実施してください」と述べました。

９月２５日時点において、今年度の「総括寄宿舎指導員」選考の実施について府教委は明らかにしませんでした。このことを受けて、大障教寄宿舎教員部は急遽、寄宿舎教員を対象に署名にとりくむことにしました。９月２９日から署名をスタートし、現職の寄宿舎教員４３名に呼びかけ、全員から寄せられた署名を手交しました。

府教委に対し署名手交する白木寄宿舎教員部長

劣悪な賃金体系におかれる寄宿舎教員

寄宿舎教員は教育職二表１級に位置付けられており、４０歳以降は昇給カーブがフラットになり、賃金がほとんど上がりません。

１９９３年、大障教を中心とした要求と運動により、大阪府において「専任寄宿舎指導員」の任用が実現し、寄宿舎教員の賃金が大幅に改善されました。この制度は、寄宿舎教員の賃金を「教育職二表２級」に格付けするもので、５２歳以上の希望者全員を対象としていました。

その後、２００７年に府教委は制度を変更し、「総括寄宿舎指導員」選考が持ち込まれました。制度が変更された当初は、府教委はこれまでの経過を踏まえ、「『総括寄宿舎指導員』任用のための選考要件は年齢を４８歳以上とする。２～３回選考を受験すれば総括職に任用されるので不利益はない」と大障教に説明していました。

しかし、維新府政誕生後の２００９年度から選考制度は導入当初の府教委の考え方から大きく変更され、「総括職」の人数を低く抑え込むなど、現場に分断を持ち込んでいます。

現時点において「総括寄宿舎指導員」選考は、寄宿舎教員が「教育職二表１級」の劣悪な賃金体系から賃金改善を得る唯一の方法であり、寄宿舎教員の多くが「選考の実施」を望んでいます。加えて、府立支援学校３校に設置されている寄宿舎には９名の「総括寄宿舎指導員」が配置されており、内１名が今年度末で定年退職です。欠員補充は喫緊の課題であり、選考の実施を強く求めました。

寄宿舎教員全員の思いを府教委に届ける

参加した寄宿舎教員８名全員から「１日に３～４人で宿直している。夜になると管理職もいない中、安心と安全を守っている」「今年、４８歳になる者もいる。毎年選考を行わなければ職場のモチベーションも下がる」「同じ年齢で２級に格付けされているかされてないかで月に３万円も違う。ボーナスや退職金も含めれば大きな差となる」「それぞれの専門性はすごく高い。毎年、選考試験をするべき」などの訴えが続きました。山内副委員長は「今、現場の声を聴いてもらった。署名の一言欄には今日来られなかった人たちの思いがびっしりと書かれている。私たちは、誰もが４８歳で教育職２級に格付けされることを求めている。「総括」の選考では、当初の賃金改善のための制度から変質し、『新たな職』に位置付けて職場に分断を持ち込むものになっている。寄宿舎の先生方の努力でチームワークを保っている。『選考試験をしてください』ということをどんな思いで訴えているのか真摯に受け止めてほしい。私たちからすれば最低限の要望だ。ぜひ検討を」と訴えました。

署名手交後、運動を継続し、「総括寄宿舎指導員」の選考基準を抜本的に改善し、誰もが「教育職二表２級」に格付けされるように改善させようと決意を固め合あいました。

大障教ホームページアドレス　http://fc06331220171211.web2.blks.jp/　Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

人間の体を守る免疫が、がん細胞にはなぜ働かないのか？今年のノーベル医学・生理学賞の受賞が決まった本庶佑(ほんじょたすく)京都大学特別教授と、米テキサス州立大学のジェームス・アリソン博士の研究は、この謎を解き明かしました。

免疫細胞は、活発になりすぎると健康な組織まで壊してしまいます。本庶氏らは、免疫細胞の働きにブレーキをかける遺伝子「ＰＤ－１」を発見しただけでなく、がん細胞がＰＤ－１を利用して免疫細胞の攻撃から逃れていることを突き止めました。そして、２０１４年に治療薬「オプシーボ」の実用化に成功したのです。オプシーボを使った治療法は、副作用が少なく、幅広いがんに持続的な効果があります。従来のがん治療に加えて、「免疫療法」という新たな治療法に道が開かれることになりました。

しかし、本庶氏らの当初の目的は、がん治療ではなく、免疫細胞であるＴ細胞「アポトーシス」の解明でした。その中で偶然発見されたのが遺伝子「ＰＤ－１」で、結果的にがん治療薬への応用ができるようになったとのことです。

こうした経過は、真理を探究する基礎研究が、想定外の画期的な成果に結びつく可能性を持つことを示しています。本庶氏は、記者会見で「生命科学に投資しない国は未来が無い」と述べ、「もうかっている分野にさらにお金をつぎ込んでいては、後れを取る。基礎研究を組織的、長期的な展望でサポートし、若い研究者が人生をかけて良かったと思える国になることが重要」だと強調しました。国の予算を動かす人たちにも、こうした訴えには、ぜひ耳を傾けてほしいものです。

みんなの心が温まる２日間！

ベテランと青年がともに学びあう大切さを共有！

ブロック別学習会シリーズ②

北河内ブロック合同宿泊教研
4人がレポート報告

8月3日、4日の2日間、北河内ブロックの合同宿泊教研を行いました。今年で6回目になり、交野支援学校、四條畷校、寝屋川支援学校、枚方支援学校、守口支援学校から32人が参加しました。今年は定年を迎えるベテランの先生2人の話のほか、新歓教研で好評だった「ちょっと先輩の話」コーナーを設け、青年2人が話をしました。

1日目学習会①「私のライフキャリア（しごと、なかま、カヌー、そしてこれから」
寝屋川支援学校分会　鶴岡敬三さん

1日目は「私のライフキャリア（しごと、なかま、カヌー、そしてこれから）」というテーマで、寝屋川支援学校分会の鶴岡敬三さんが話しました。支援学校に初めて赴任した八尾支援学校の話から始まり、夏休みにおこなった夏祭りや保護者との勉強会、サマースクールなどの話がありました。また先輩からは組合のこと以外に文化的なこと、カヌーなども習ったそうです。そのつながりで、今でも若い方をカヌー体験に誘っておられます。守口支援学校では、集団に入れないSくんとの関わりを話しました。寝屋川支援学校では、赴任して2年目で部主事を引き継ぐことになったことや、子どもたちが高等部卒業後すぐに働くことに疑問を持ち、専攻科や「学びの場」作りなどに携わっていることに触れ、豊かな青年期教育に関心を持たれ、今後は、「学びの場」の開所に向けて準備されるようです。

発表を聞いてみんなが1人ずつ感想を述べ合います

ちょっと先輩の話「白いキャンバスと色鉛筆を渡されても」
四條畷校分会　城田愛美さん

後半は、「ちょっと先輩の話」で、まず四條畷校分会の城田愛美さんが「白いキャンバスと色鉛筆を渡されても」というテーマで話しました。「生徒を守るのが教師の仕事」と教師になることを決意し、「子どもと誠実に向き合う先生になりたい」と思い、がんばってきたことを話しました。そして、教師になって「好きなように」していいよ」と言われたことを、「りんごがわからない人にりんごは描けない」ことに置き換えて話をしました。イメージはできるが、形にするのはむずかしい、子どもとどう向き合ったらいいのかと悩んだそうです。夏休みに行われた「保護者の思いを受けとめる」という学習会に参加し、お母さんの発言を通して何かできることはないかと考えるようになり、自分の変化を感じているそうです。

ちょっと先輩の話「見方を変えれば見えてくる」
枚方支援学校分会　詫間晋二さん

2人目は、枚方支援学校分会の詫間晋二さんが「見方を変えれば見えてくる」というテーマで話をしました。枚方支援は2校目ですが、初任から進路の仕事に関わる中で、「企業就労が一番の幸せ」という考えに疑問をもつようになったそうです。そして働く本人が置き去りにされている状況や、進路を選ぶのをいっしょに考えるのが教員だと気づいたそうです。作業所の方に「学校ではいろんなことを経験してください」と聞いてしっくりしたこと、「高等部3年間だけで決められるものではない。運動会や修学旅行などの行事を通し、友だちとの中で成長がある」とも話しました。まとめとして「就職率アップも見方を変えれば絶対でない」「批判的な目線が大事、行動できなくてもアンテナを持つことが大事」と熱く語りました。

2日目学習会②「私が出会ってきたもの」
四條畷校分会　大島敦子さん

2日目は、四條畷校分会の大島敦子さんが「私が出会ってきたもの」というテーマで話をしました。大学時代に学んだ、教師がどうあるべきかという熱い思いや、岡山での重心の子どもたちの笑顔の話、そして「教育は命を強める」という言葉に、まず胸を打たれました。結婚後、大阪で赴任した寝屋川支援学校では、中学部の教育目標を論議した話がありました。「思春期に向き合う」「いろいろな葛藤を乗り越えていく」という内容を入れた思いや、いろんな出会いの中で仲間をつくること、おかしいことを共感できる人を探して仲間で解決する大切さを語りました。そしてできない自分を認め、しんどいと言えるのも大事だと話しました。国語の教師であり、歌や太鼓と多才な大島先生ですが、心のケア、読み聞かせから、肩こり予防、犬の健康管理まで、大学のオープン講座なども利用して研修を重ねられました。最後に「興味をもってやり始めるのに遅すぎることはない」「プロの技に触れ、本質を学ぶことが大事」「楽しいと思ったこと、伝えたいと思ったことを教材にすればよい」と結びました。

ベテラン2人の発表では、参加者から「好きなこと、プライベートで没頭できるものがあってこそ、充実した人生」「教師が豊かな心だからこそ、一人ひとりとの関わりが大切にできる」「子どもの葛藤を乗り越える姿、がんばりをみてあげたい」「日々子どもといっしょにいてあげることが、心の支えになっていると気づいた」などの感想が出されました。教研では、これまでもベテランが人生を振り返り、「人生を楽しむゆとりを持ててこそ、子どもを中心にすえて、子どもが楽しめるような実践が考えられる」ことをみんなで共有できました。また青年2人の発表のすばらしさにみんなが感動し、ベテランと青年が互いに学び合うことが大切だと確信できました。心が温かく、いっぱいになった2日間でした。

枚方支援学校分会　佐々木起美子